

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究(三十四)—

津 守 真

Yはどのようにして幼稚園にゆくようになったか

五歳児の三学期、Yは幼稚園で最も活潑に遊ぶ子どもの一人である。

この同じ子どもが、一年前の四歳児の終りころには、幼稚園にいくのを嫌がっていた。このことは、このシリーズの中で前に記したことがある。(七十八巻一号)どのようにしてこのような変化が生じたのであろうか。

この間には毎日の具体的な生活が連続してあることはいうまで

もない。しかし、何か特別な試みや方法が効果をあげたというようなことはない。もっと子どもの心の奥で、子ども自身の世界が変化していったのであろうと思う。そのことをこの子どもの一連の描画が示してくれるので、この時期の描画からこのことを考えてみたい。

外出のテーマ

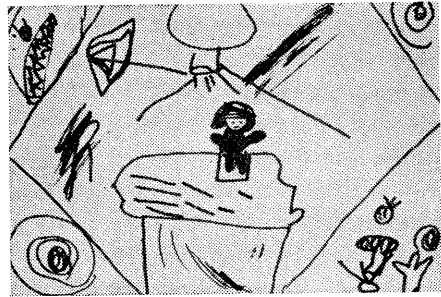
Yの幼稚園入園前後の描画を前に示したが、入園を楽しみに待っていたころ、友だちと手をつないでいる描画や戸外のテーマが多かったのに、入園後の描画は、囲みの内側に人を閉じこめる描

画や、家の内部のテーマがYの描画の大部分を占めるようになっていた。

いま、その後の描画を並べてみると、内部の描画がしばらくつづいた後、再び外出のテーマがあらわれるのを見ることができ。子どもが自分から描きはじめた描画は、そのときのその子どものも内心を吐露したようなもので、一枚一枚、手にとってみると、豊かに可愛らしいものを感じさせられる。そうした描画を並べてみると、更にそこに一貫した心の動きを観察できることがしばしばあって、それは驚く程である。子ども自身、自分の考えを線や形や色に表わしてゆくことによって、自分で確かめ、また模索しているのだと思う。一枚一枚がその過程だから、一つのテーマに分類されるような場合でも、それぞれ違ったヴァリエーションを示していて、全く同じ描画はひとつもない。子どもはええをかくことによって、一歩ずつ、自分の階段を乗り越えているのだと思う。

Yの描画は非常にたくさんあるので、ここではごく一部分しか示すことができない。

五歳児の一学期、六月三日に描かれたものが図1である。女の



▲ 図 1

子が囲みの中のスタンドの上に一人で坐っている。上から電灯の光が照しているけれども、囲みの外には、三角の歯の並んだ怪物や、その他得体の知れない生きものが四隅に描かれている。女の子は囲みの内では安全だけれども、外部は未知の脅威に囲まれているように感じられていると見てよいであろう。

図2は六月二十四日の描画である。女の子が部屋の内部にいて、家の中の小道具に囲まれている。水道の蛇口、食器戸棚、衣類戸棚、卓子に椅子など日常的な物が描かれ、戸棚には把手がついている。天井には華やかな電灯が輝やいている。兎の女の子は



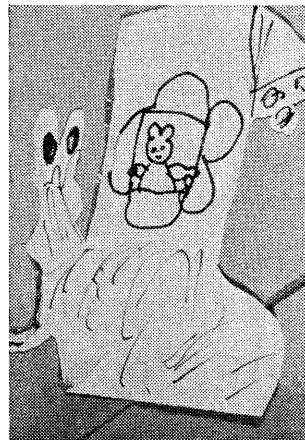
▲ 図 2

手にハンドバッグを持っている。内部にいる女の子の明るい幸福感が感じられる。

図1を見ると、幼稚園にいきたくない子どもが内部に逃避しているように見えるけれども、これを逃避や退行とのみ見ることは妥当でないだろう。ほとんど同時に、図2のような、内部の明るさや温かさを楽しむ描画が多く見られるのであって、内部は希求される価値となっている。内部と外部とは、いずれかがいずれかに従属するものではなくて、両者は共に、それぞれの方向において



▲ 図 3 (1)



▲ 図 3 (2)

て、深められ、追求されてゆく性質のものであろう。ただし、一つの時期をとり出してみると、いずれかの方向に傾斜がみられる。

図3(1)(2)は、Yが五歳児の二学期の末、十二月二日に描いたもので、この時期にあらわれた最初の外出のテーマである。図3(1)では、家の外に、兎が出てゆく。靴の形をした家のつき出した屋根には、電灯がつけてあり、外部を照している。こういう細部に

いたるまで、子どもの意味ある世界が溢れ出しているのも、驚く程である。Yはこれを描き終ると、はさみで切り抜き、裏側に図3(2)を描いた。これは兎が家の内側から窓を開いて外を見ているところである。同じ兎が外に出てゆく状況と、家の内において外を見ている状況とを二つかき並べているのは、二つの心の状態を自分で認識していることを示すものであろう。

図4(1)(2)(3)は、同じく五歳児の二学期末、十二月六日に描かれたもので、一枚の紙が数個の区画に分けられている。「おでかけ」と云って(1)の左上からかきはじめた。

一枚目

「おでかけ

おでかけ やっぱり 大すきだ。おでかけ、たのしいおでかけ。

ジャンパーきていくよ。(上段左)

あれ、きのこのおうちみたいなおうちがあった。(上段右)

そこに女の子が住んでたよ、とってもかわいい女の子。(下段左)

あれ、お豆みたいなはっぱ、はっぱかな。よくみてみよう。(下

段中)

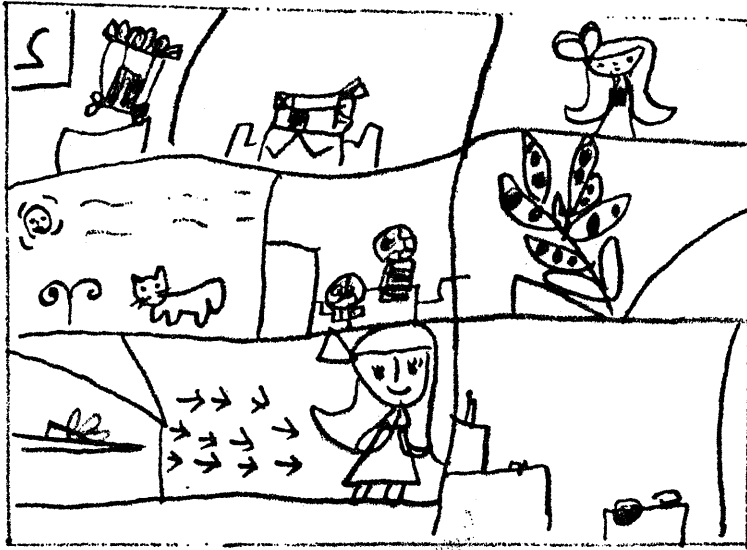
おばさん、こんにちは。(下段右)」

▼ 図 4 (1)



二枚目

「さ、学校からかえったら 工作しよう。(上段左)



◀
 4
 (2)



◀
 4
 (3)

でも きょうはだめか。ランドセルしょってるの。それならまたかえりましょう。おうちにかえったら、またおピアノか。やっぱりやめた。エレクトーンする。(ここんとこよと指さす 上段中)

まだごはんたべ中、また学校からかえってきたの ドア(下段右にとぶ)

もうお豆がなくなったかな、ちいちゃいお豆もなくなっちゃ。大きいお豆もなくなっちゃ。(中段右)

白金堂にいつて、風船かってこよう。何がほしいんですか。風船四つくださいな。あれ、四つじゃないよ。いいおまけ。さー、かえろう。ガラー(矢印をつける。下段左)道まちがえちゃったかな。あら、またもとにいつちゃった、また行ってみよう。あれ、おうちをうらだったかな。さー、おうちにかえろう。あー、もうおうちについてたのか。

いただきます。おかしい。おやつすぎてたのか。ごはんもすぎてたのか。おいしいものちょうだい。さあ、くるくるくる、ねむくなっちゃった。あれ、ねこちゃんかな。なあんだ、ミケかな。どうしよう。こんないいお天気じゃまぶしいな。(中段左)

三枚目

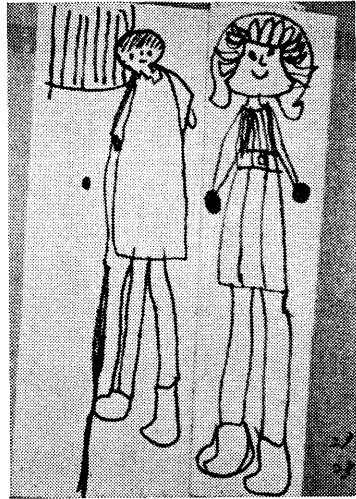
「フワフワ、ねむいや。そうだ、今日は遠足の日だった。いこ

う、プップー、バナナとってきちゃった、ほんと、おうちのおみやげにしよう。(下段右から左にかき、次に上段右から左に向ってかく)

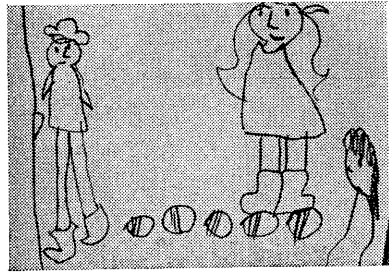
おうちかえろう。スヤスヤ、なんかあつい。あれ、びょうきだ、あそびすぎ。(上段左)

内と外の間を揺れ動く心

子どものことは通りに記したので、分りにくいところもある。全体としてのテーマは外出(おでかけ)であるが、家に帰るテーマがくり返し挿入され、最後には、「あれ、びょうきだ、あそびすぎ。」で終わっている。外に出てゆくことと、内に帰ることとの間を揺れ動いている子どもの心がうかがい知られる。外に出てゆくときには、二枚目の白金堂のはなしにみるように、道に迷ったり、家に帰る道順の認識がはつきりしなかったりして、外出に伴う不安な心も示される。しかしまた、外出の途上で猫に出会う。この猫はYが家で親しんでいるミケである。家の外にも親しい友だちがいるし、楽しさがある。そこで全体として見れば、一枚目の冒頭にあるように、「おでかけ やっぱり 大すきだ」という外向き的心が主流となっている。



▲ 図 5 (1)



▲ 図 5 (2)

場合も同様のことが多く、最初遊びは
 じめたときよりも、時間がたつうち
 に、子どもの内心の課題が一層明瞭に
 あらわれてきて面白いと思うことがし
 ばしばである。この子どもは、いまや、
 外出のイメージをもって動きはじめた
 が、それは、内部との関連を自分で納
 得するまで揺れ動きながら探究するこ
 とによって、確かなものとされてゆく
 のであろう。

Yはこの三枚つづきを終ると、「いちばん面白いのどれ？ 白
 金堂のはなし？」ときく。道が分らなくなって、紙の裏側にはい
 けないのに、家は裏の方だったかと思ったり、戸外と家との関係
 がよほど気になっているようである。一枚目は外出のテーマとし
 ての筋が明瞭であるのに、二枚目以下になると、話としての脈絡
 も、一見、不明瞭になってくる。外出とは反対の内部のテーマと
 の関連を探して揺れ動いている心の状態が、脈絡の不明瞭さとな
 ってあらわれているのではないだろうか。子どもが自分から描き
 はじめた描画は、しばしば、一枚目よりも二枚目、三枚目とかい
 ているうちに、その子どもの心の内実があらわれてくる。遊びの

このころのYの描画には、内と外のテーマで描かれているもの
 が数多くある。あるときは内部のみ、あるときは外部のみ、また
 あるときは内と外の両者が描かれている。五歳三学期の描画から
 もう一枚だけ示してみようと思う。図5(1)(2)は、五歳三学期一月
 九日に描かれたものである。最初、画用紙を両側から折って人物
 を画いた。それから折った部分を左右に開いて描いたのが図5(2)
 である。説明を加えるまでもなく、扉を開いて外に出てゆく動作
 が描かれているのを見ることができよう。外出する人の足跡
 がはつきりと描かれている。内と外の関連を模索しながら外に出
 てゆくときには、無制約に外に飛び出したままにはならない。あ

るときには外に出、あるときには内に入り、その足跡は確かである。

熟成するイメージ

幼稚園で、皆の中に入ってゆく子どもと、ひとりでいる子どもとある。幼稚園にゆくのを嫌がる子どももある。それぞれの子どもは、時間の流れの中で見るならば、ある時期の現象である。おとなの頭は直線的に物事を考え易い。いま、外に出てゆくことを嫌がる子どもに、いまそれを許したら、いつまでも外に出てゆかないだろうと考えるのがおとなの頭である。そして、子どもは、もっと別のところで、静かに動き、何かに向って準備されつつあることに気が付かない。子どもがこれから先、長い間、自分自身の内側の課題として追求しつづける、その最初の根源的なイメージは幼児期にあると私は思う。子ども自身の心が納得するまで、幼児期なりにそれを探究し、熟成させる時間を子どもは欲しているのだと思う。昔だったら、いつまでも空の雲を眺め、土をいじり、往来をゆく人を見て過していた時期に、外からの課題と時間の枠に追われて過したら、この無形のたいせつな心の部分を硬化させてしまおうだろう。

それぞれの子どもが心の内に抱き、追求し、形をかえて反復してゆく心のイメージは、子どもによって異なる。ここでとり上げたのはひとりの子どもの例である。三十人の子どもがいれば、三十通りの個性がある。おとなにその全貌が明らかにされることはないが、子どもにふれるたびに、そのある部分を見せられる。だから、保育には、興味のつきることがない。興味をもって、子どもと楽しんでつき会うことのできたときには、その子どもの成長に手をかしているのであると思う。

幼児の心の中に抱いているイメージが熟成するときに、行動も次の位相に移ってゆく。保育者はその間何もしないで待っているのではない。そのときに子どもが楽しんでしていることに目をとめ、一日を子どもにとって満足のゆくものとしてゆくのである。幼稚園の時期に、その後長い間、折にふれて心の中に反復されるであろうような心のイメージがつくられる。この意味で幼児期は一生の中で特別な時期である。人間らしさのものができ上がる時である。五歳児の三学期も終りに近づいて、それぞれの子どもがのびやかに遊べるようになってきている姿を見るのは快い。それが幼稚園の時期の収穫であると思う。

(つづく)